

元祖 モリモリ書店

今年最後可、ふお年を。また1月にあいまよう、
令和2年度 愛知教育大学附属岡崎中学校 読書だより

最近、カセットテープで
音楽をききたい年頃にハマりました。

第66話 R02.12.16(水)
「一人一人の困り感に
寄り添うことで。」

★今回、紹介する本は、『食べることと出すこと』（著/頭木弘樹、出版/医学書院「シリーズ ケアをひらく」）です。

このシリーズはすくまは本が
多いですね。

『絶望名人カフカの人生論』（図書室にもあります）などで有名なカフカ（『変身』で有名な）研究者・文学紹介者がこれまでの闘病生活を語った1冊です。

作者は大学のあるときに、「潰瘍性大腸炎」という難病に突如襲われ、普通に排泄ができなくなり、普通に食事することもできなくなります。そして、40歳を過ぎた今も、24時間常に病気がひどくなることを怖れて生活しています。

そのような生活をおる意味客観的に、ある意味悟りをひらいたかのような著者独自の視点で語られていくところが、この本の魅力です。どれだけ世の中には「普通」の目線（マジョリティ目線？）で捉えられていることが多いかがよくわかります。「この人には何か事情があるのかもしれない」と思えることが大切です。



人間は、
食べて出すだけの
一本の管。
(だが、悩める管だ……。)

個性的なカフカ研究者として知られる著者は、大学生のときに潰瘍性大腸炎という難病に襲われた。食事と排泄という当たり前のことが当たり前ではなくなる。世界はどう変わったのか。絶望的な日常と、絶望をくぐり抜けていくわけにはいかない日常。その狭間に響く不思議なユーモア。

医学書院

病気が24時間常に業々というのびんびんです。

★ 同じ色に染まらないからといって排除しない (p.125)

★ 一生懸命想像はするけれど、届かないものがあるということをお忘れはいけません (p.212)

★ 何か事情があるのかもしれない。

★ 本書はそういう人ではないかもしれない (p.268)

「あたりまえ」や「正しさ」も見所度によって変わります。★

少しの想像力で世界は変わる。

★ いろいろな文学著作の引用もいっぱい。